

# 『僕のヒーローアカデミア』

Ph.D

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『僕は悪くない』

『だって僕は悪くないんだから』

世界総人口の約8割が超常能力「個性」を持つ超人社会。

「個性」を悪用する敵(ヴィラン)を「個性」を發揮して取り締まるヒーローは人々に讃えられていた。

いつしか「超常」は「日常」に、「架空」「現実」に。

そんな世界に、「混沌よりも這いよる過負荷」あるいは「愚か者と弱者の味方」もしくは「裸エプロン」と呼ばれていた、惚れっぽいジャンプ好きの負け犬が現れた。

いつか「英雄」になれなかった男が今度は「ヒーロー」を目指す！

…そんなお話

初投稿です

亀更新、独自解釈などがあります

それでも気にしない！という方は、これから完結までお付き合いをよろしく願います！

※一応完結までの流れやオチはできています(それゆえ展開や設定の変更には応えにくいです)

※今作の球磨川くんは原作終了後の球磨川くんであり、過負荷全盛期の頃の球磨川くんではないので、ほかの二次創作に出てくる球磨川

くんより甘々で違和感があるかもしれません

※→→なので過負荷全盛期の球磨川くんが好きな人には合わない  
可能性が高いです

目次

|           |    |
|-----------|----|
| 始動        | 1  |
| 侵入        | 6  |
| 説明        | 12 |
| 特典        | 17 |
| 説明2       | 21 |
| 出会い       | 27 |
| 修行        | 33 |
| 出会い2      | 39 |
| 緑谷出久：オリジン | 47 |
| 緑谷出久の戦い   | 54 |
| 新たな兆し     | 60 |

## 始動

誰もいない道を、どこの記録にも残っていない男が1人歩いている

その男が、巨大なネジを片手に少し紺色がかったスラックスのよ  
うなズボンとそれとは対照的に真っ白な長袖のTシャツを着ている  
黒髪童顔の青年が、彼が本作主人公である

彼はちやうど自らの記録をすべて『なかったこと』にし終え、かつ  
ての友人たち（とは相手は思っていないし、もしかしたら彼自身も  
思っていないかもしれないが）への救済を全て無碍にされてきたとこ  
ろであり、また新たな挑戦をはじめようとしている

新たな挑戦、それは「人探し」

『安心院さんつたら、どこにいっちゃんだか…』

『探すこっちの身にもなつてほしいぜ』

『不出来な姉を持つと弟は優秀になるというけれど、まったくその通  
りじゃないか！』

歩くのをやめ、右手を額に左手を腰に置き『僕は困っているんだ』と  
主張するようなポーズをとりながら、誰に話すのでもなく虚空に向  
かって独り言を始めた彼の後ろに1つの影があった

その影は彼のポーズの真似を、というよりも人間の真似というポー  
ズをとりながらまるで不出来な弟を見る姉のような表情で、第一声を  
発した

「ただいま」

彼の耳に聞きなれた声が入り、振り向きながら再会を喜ぼうと、『お  
かえり』と一言伝えようと振り向こうとするがしかし……

「そして、さよならだ」

「友情のスキル 『超越同衆』 フレンドシップマジック

怒力のスキル 『疾風突闘』 スピーディペイン

勝利のスキル 『多勝の宴』 アベタイザーパーティ

信頼のスキル『頼りないのは元気な証拠』ホープフルレターケース  
敵討ちのスキル『復讐漂う』リベンジアピール  
仲間のスキル『仲間撃ちの話』ゲッツーライセンス  
血筋のスキル『伝統は二の継ぎ』チエアマンジュニア  
ロマンのスキル『浪漫注意報』ワーニングアンソロジー  
夢のスキル『夢無実』ノットギルティ  
相棒のスキル『お互い様』ベリイバディボディ  
ひねくれのスキル『定例隠し』ハイドレギュラー  
恋愛のスキル『愛対人』バーサスラブリー  
純粹のスキル『鎌滔々』ケアレサイス  
運のスキル『ふんだんの行い』ゼロベースコンデンサー  
直観のスキル『胸騒ぎの海勘』ハートブレイクシーセンス  
正義感のスキル『単文孤証の正統性』フアジージャステイスバレイ

ドリア

縁のスキル『仲々ない縁断』グルーミーガータートス  
ライバルのスキル『好敵種』エネミーシード  
殺さないスキル『鍵？すべき命』エゴイステイツクキーライフ  
剽軽のスキル『段々冗』ユーモアステップ  
無欲のスキル『金も命もいらぬ』デイスピアデザイア  
危機一髪のスキル『九死に九生』ベストナイン  
成長のスキル『限界知らず』レベレーター  
優しさのスキル『優悦感』ユアエクスタシー  
反骨のスキル『逆道登り』カウンタークライム  
使命のスキル『使命使命』ベリーグッダー  
悲しい過去のスキル『想回感』フレツシユノスタルジー  
根性のスキル『にやりと笑って痩せ我慢』アンチノックルルート  
怒りのスキル『情直安定』アングリースタビリティ  
もてもてのスキル『異性豊かな人』ミサイルフェロモン  
弱小のスキル『下から目線』ヴィジュアルウオー  
諦めないスキル『否諦』ギブダウン  
驚異的な回復力のスキル『全治死』リカバリミンチ

愛嬌のスキル『可愛い子世に憚る』プレテイエーコーチャーズルール  
家族のスキル『家族回帰』ファミリーレポート  
人情のスキル『義理兆候』デューティサイン  
二枚目のスキル『二枚鬼舞』デッサンフルハウス  
三枚目のスキル『三枚三昧』スケルトンスリーカード  
動物と心を通じるスキル『動物交感』アニマルウイスパ  
過剰のスキル『永遠なる角逐』ネクストインフレーション  
正々堂々のスキル『段違い公平棒』ウルトラフェアポール  
求心力のスキル『魅了』カリスマイル  
好感度のスキル『手放し褒め』ナイスガイバビリオン  
スタイリッシュのスキル『決め細やか』リカーフアッション  
口癖のスキル『大切なひと言』レトリックパラソル  
必殺技のスキル『灰燼の一撃』キラアタック  
許すスキル『握手投げ』ノーサイドスロー  
自由のスキル『自由化』フリークス  
大団圓のスキル『幸福の終わり』ハッピーエンド  
主人公補正のスキル『善行権』エンゼルスタイル  
「夢の世界」へ送るスキル『口区間』ドア・トウ・ドア」  
『か、……はっ……』  
「待ってるぜ、球磨川くん」  
本作主人公、またの名を球磨川禊  
第1話1754文字手前で死亡

『死ぬかと思ったぜ』

『安心院さんのお茶目はともかく、ここはどこなんだろうね』

彼の目の前には大きな学校がそびえ立っていた

目の前の学校を見上げている彼の顔に、1つの小包が落ちる

『いたたあ』

『ん？これは…』

【親愛ならぬ球磨川くんへ】

今君の目の前に広がっている学校、雄英高校というのだけれど、そこにたまたま偶然1京分の1くらいのみまぐれで、僕がいたずら書きを消し忘れてしまった壁があつてね

やぶさかではないと思うからなかつたことにしておいてくれ

……… 例えやぶさかであつてもだ、まさか不出来な姉の願いを無碍にするような弟ではないだろう？

P. S. いたずら書きをなかつたことにするのにどんな方法を用いても構わないけれど、立つ鳥跡を濁さないように】

『ほう、なるほどねー』

『もちろん当然やぶさかでなくななくななくなから頼まれようか』

『つと、もう1通あつたんだね』

小包の中には手紙がもう1通入っていた

【ついでにプレゼントだ】

一応不法侵入とかさせてしまうからね

もちろん、球磨川禊の前に法なんざあつてないようなもの、あるようでないようなものだけでも

今後の活動に関わってくるから君のコスチュームとマスク（風邪用のやつじゃないよ）を贈ろう

P. S. 必ずつけなさい

親愛なる人外安心院さんより】

読み終わると空から、おそらく学ランのジャケットであると思われる上着と顔全体を隠せそうなマスクが降ってきた

『これは… 僕の青春、水槽学園の制服のジャケットに…』

『いつだったか高貴ちゃんが読んでたマンガ、東○喰種の主人公が被ってたマスクかな…？』

落下物の正体にあたりをつけ、彼にはおとなしく、ある種天邪鬼と言える彼にしては非常におとなしくジャケットとマスクを装着する



『久しぶりに、というかマスクに至っては生まれて初めてだけど、悪くないね』

『まあ別段何が良いつてわけじゃないんだけどっ!』

コスチュームを揃えた彼はぶつくさと独り言を、おそらく聞いているであろう人外に向けて呟く

そして目の前に広がる高校の、その正門と思われる嚴重で厳戒な門に螺子を螺子込む

巨大な高校の正門、雄英バリアーは消え失せ…いや、『なかったこと』になる

その日ヒーローを育てる善良な市民の味方で一般世界の希望である雄英高校は、混沌よりも這い寄る過負荷球磨川禊の、ヒーローでも敵でもない圧倒的な過負荷の、その侵入を許してしまった

## 侵入

『いやしかし、いたずら書きって言われても場所を指定してくれないとわからないぜ』

そうぼやく球磨川くんの前に、やけに大きい校舎が現れる。

『……もしかなくてもあれかな?』

校舎の壁にデカデカと書かれた文字、おそらくいたずら書きだと思われるそれには

【いたずら書き】

と、書かれている。

『いやはやまったく、僕のこと大好きかよ?』

『かまって欲しいお年寄りってやつ?』

【いいや、違うしね

お年寄りっていうかお年頃ってやつだしね

球磨川くん死ね】

球磨川くんのつぶやきのような問いかけに答えるように、いたずら書きが形を変える。

『ほー』

『文字にスキルがかけられているのか、それとも安心院さんが隠れているのか……』

『わからないけど……ま、関係ないか』

言葉を切ると同時に螺子を投げ、自らへの罵倒の書かれている、いたずら書きのされている壁に螺子込み『なかつた』ことにする……

そして校舎が壊れた。

『わーお』

『これは、なんというか、あー、フアンタスティックだ』

球磨川くんが驚く、というより呆れたような言葉を漏らすとそこへヒーローたちがやってきた。

「おい、これをやったのはお前だな?」

ヒーローと呼んで良いのか怪しい、そう思わってしまうほど汚らし

い感じの男が尋ねる。

おそらく、「これ」というのは「壊れた校舎」もしくは「校舎を壊したこと」を指しているであろう。

いや、おそらくというか十中八九そうなんだろうが。

『なんのことだい?』

『確かにいたずら書きを消したのは僕だけでも、校舎が壊れた現場に居合わせたのも僕だけでも、僕に校舎を壊すつもりもなければその動機もない。』

『そもそも僕は校舎を壊すことではないことを理由にこの場にいるわけで、確かに僕の目の前で校舎は壊れたけれど、それはもしかしたら春一番と呼ばれるような強風による倒壊かもしれないし、もしかしたらポストが赤いせいかもしれない。』

『だから...』

『僕は悪くない』

意味不明

それが、初めに話しかけた男―イレイザーヘッド―をはじめとしたその場にいる全てのヒーローたちが抱いた感想であり警鐘であった。

「なにせよ、だ」

「この場にいる以上お前には建造物等損壊罪をはじめとしたいくつかの容疑がかけられる」

「大人しく捕まってもらうぞ」

イレイザーヘッドが話を進める。

『いやいやいや、なにせよ、だ』

『そもそも校舎は壊れてなんかいない』

『なにっ!?!』

イレイザーヘッド以外は未だ状況についていけないのか、またもやイレイザーヘッドのみが反応をする。

校舎の復元は『いたずら書きをなかったことにした』という現実を『なかったことにした』だけであるが、球磨川くんがそんなデタラメにデタラメを重ねたようなスキルを持っていることなど小指の甘皮ほども知らないイレイザーヘッドからすれば十分驚愕に値する事象で

あろう。

『悲しい勘違いによって一方的な暴力がふるわれようとしているよ  
うだけれど』

『僕に戦う意思はない』

『だから、これは正当防衛だ』

イレイザーヘッドたち雄英高校の教師であるヒーロー陣は、驚愕に  
より反応が遅れた者や状況についていけない者等、様々いたが一  
様に、なんの反応もできず背後の(球磨川くんからすると目の前の)校  
舎の壁に縫いつけられるように螺子込まれた。

縫いつけられるよう螺子込まれた、とは一体どのような状況なのか  
全くもって想像し難いが、体から螺子が咲き誇る、もしくは螺子と壁  
に挟まれた人間ハンバガーのような状況であり、さらに端的に言え  
ば(今までが端的であつたかというところという訳では無いが)「球磨川  
禊初登場時のチーム負け犬のような状況」である。

この場に鍋島猫美がない以上全滅は必至で確実だろう。

実際、その場にいたヒーローたちは全滅であつた。

しかし、ヒーローは割と遅れて登場するということを忘れては行け  
ない。

「私が来た!」

ヒーロー・オブ・ヒーロー、この国の心の拠り所とも呼べる”柱”  
であり”平和の象徴”がやってきた。

オールマイト

彼はどんなに困ってる人でも笑顔で助けちやう超カツコイイヒー  
ローである。

まあ、だからといって

「ぐ、うう…」

『まったく通りすがりの一般人に殴りかかるなんて。』

『なっていないぜ、ヒーロー(笑)』

絶対に負けない、というわけではない。

『弱さ』がないはずがないのである。

負け尽くした男、球磨川禊からすれば、たとえ常勝のヒーローであ

ろうとナンバー1ヒーローであろうと、弱点の塊のようなものである。

球磨川くんが螺子を両手に構え不敵に笑う。

その2m程先でオールマイトが肩膝をついている。

歯を食いしばり目の前の敵を睨む彼は、正しくヒーローなのだろう。

「まだっ、負けてはいない……私は負けてはいけない!」

「プロはいつだって命懸け、っ……」

「Detroitooooo……Smash!!」

オールマイト、彼元来のヒーロー性によるものか、はたまた先日出会った後継者候補のことが頭によぎったのか、彼は倒れない。

「やったか……?」

「やったか?は生存フラグだ。」

『鎖骨が折れて肺に突き刺さっちゃったかなー』

『一生後遺症が残るなー、これは!』

立ち上がる球磨川禊。その姿は、その不気味な気持ち悪さは、正しく過負荷の名にふさわしいものであった。

「はあ……はあ……今を受けて立ち上がるか……」

「残念ながら私はそろそろ限界が近い、君ももう戦える身体じゃないだろうっ……」

「次の攻撃で最後にしよう」

「もしくは、もう抵抗を辞めて投降しないか?」

『おいおいおい……ヒーロー(笑)みたいな奴がそんなこと言っているのかよ』

『それに僕はまだまだ戦えるんだぜ?』

『次の攻撃で最後?いやいや、ここからずっと僕のターン、さ。』  
そう言い切るとたちまち球磨川くんの傷が癒えていく。

否、まるで『なかったこと』になったように傷が消えていた。

「なん……だと……」

オールマイトの顔が驚愕に染まる。

『自信を持っている。』

『誇りに思っている。』

『君の強さは本物だ。』

『知り合いの女子高校生のパンチくらいには強いぜ（笑）』

「目的はなんだ…？」

自分の力不足を悟るやいなや援軍が来るまでの時間を稼ぐため対話を試みる。

しかし、オールマイトにとって幸か不幸か…

『目的？もう終わったよ』

彼の目的は既に達成されていた。

『トラップばつかのひどいおつかいだっただぜ…』

『なにはともあれ、大健闘だったね、ヒーロー』

『どちらが勝っても負けてもおおかしくはない接戦、世紀の大決戦だった！』

『ま、どっちも勝ってないし負けてないし、勝負は持ち越してやっただけ』

『応援してるぜ、頑張ってるねー』

『んじゃ、また明日とか！』

背を向け正門という名の雄英バリアー跡地へ歩き出す球磨川くん。

「な…っ、待つんだ！」

オールマイトはそんな彼を呼び止めるが彼はいつの間にかいなくなっている。

まるで瞬間移動をしたかのようにいなくなったが、おそらく移動の時間を『なかったこと』にした、とかそんなところだろう。

雄英高校に残されたのは、外傷がいつの間にかになくなり無傷となったプロヒーローたちと同じく無傷で肩膝をつくオールマイト。

そして元通りになった校舎と、真っ白になった壁だけであった。

東京某所、雄英高校からさほど遠くないアパートの前に球磨川くん

はいた。

『安心院さんが指定したのはここかな…？』

いたずら書きを消す直前、いたずら書きはまたも形を変えていた。

いたずら書きは地図となり、その地図はこのアパート、

『なじみ荘、か。』

なじみ荘を指していた。

## 説明

### 《なじみ荘》

そう書かれた看板のある木造アパートは、二階建てのどこにでもあ  
るような小奇麗で微妙に年季を感じさせられる、そんな外観のアパ  
ートである。

であるがしかし、その中身までもがどこにでもあるようなアパ  
ートのそれであるかどうかといえ、その答えは否であろう。

否、断じて否である。

なじみ荘、その木造建築物の正体は、人外・安心院なじみの別荘で  
ある。

「やあ、球磨川くん。僕の語り部はどうだい？」

「中々どうして様になってるだろう？」

『うわー、安心院さんが語ってたのかよ』

そうだけ。

『それはそうと、安心院さんみたいな人外と違って僕はただの浪人生  
だから全然状況が把握出来てないんだけど...』

いや、浪人生ってのは嘘だろ

君みたいなふらふら放浪してる浪人生がいてたまるかよ。

あー、(放)浪人生って？

『語り部 発言からしてシュミレータードリァリティとか水槽の脳  
とかそつち系が関係してたりする？』

その通り。

さすが、球磨川禊は伊達じゃないってか？

『いや、モノログで返事されても困るんだけど』

あー、いや、

「失礼、すまないね」

癖になつていたみたいだ

それはそうと...

「この世界の説明だっけ、長くなるからモノログでいいかい？」  
ちゃんと聞こえるようにしておくからさ。



『ま、構わないけどね』

球磨川くんが少々呆れたような顔をしながら了承してくれた。

じゃあ説明を始めようか。

僕が箱庭学園にやってくる4年前、球磨川君に会う1年ほど前の話なんだけど、僕は世界を作ってみようと思ったのさ。

笑ってくれていいぜ、あの頃の僕はシミュレータードリアリテイー辺倒な考え方しかできなかったからね。

僕に7億の端末がいるのは知ってると思うんだけど、その端末全員がスキルを持っているIF世界を作ってみたんだ。

神様になるスキル「過身様ごっこ(スペックオーバー)」で箱庭を作ったその中の要素と分岐点を弄ったりしてさ。

突然7億人にスキルを持たせちゃ世界が混乱してしまうだろうから少しずつ、確か1人目は中国の赤ちゃんに体が発光するスキルを持たせたんだっけな…

それからしばらくして、僕らが「スキル」と呼ぶ能力は「個性」と呼ばれるようになった。

「個性」を持つ者は、最初期において極少数派だったため迫害をされた。

ま、当然だよな。

常識に当てはまらない異常者たちが、同時に自分たちの安寧を脅かせる強者だったんだからね。

そのころの無個性(個性を持たない人)は個性持ちに対する根源的な恐怖心から個性持ちを迫害せざるを得なかったのさ。

まあだからといって個性持ちが黙って迫害され続けるはずもなく、そのうち個性持ちの中で強力な個性とカリスマ性を持つ人物が現れた。

そしてその時代に世界に抗うようになったんだ。

人々は現行の秩序を壊し続ける彼らを「敵(ヴィラン)」と呼び、そんな彼らを止める存在を「ヒーロー」と呼ぶようになった。

最初期、超常黎明期から2〜300年ほど経ち、ヒーロー飽和社会と呼ばれるようになったが未だに「個性」は世界に適応できず敵と

ヒーローが日々争い続けている。

「この世界についてはこんなところだね。」

『なるほどねー』

『この世界は安心院さんの黒歴史（笑）である』

『2つほど質問をしてもいいかな？』

「構わないよ。」

『いい、ただだだだだだあ…！』

「おっと、失礼つい癖で腕ひしぎ十字固めをかけてしまったようだ」

「別に君の黒歴史（笑）発言に起こっているわけじゃないから気にしないでね」

『ごめんって、謝ったじゃないか…今』

『反省しているにも関わらず技を掛け続けるほどの人でなしになっているなんて…』

「そりゃ人でなしさ、じゃなきや人外なんて名乗れねーよ」

「それはそうと、質問ってなんだい？」

文字通りお話にならないから腕ひしぎから解放して質問を待つ。

『あー…いてて、質問その1…。どうして僕はこの世界に連れてこられたのか。』

『その2。ここに来る途中に寄った学校らしき建築物は何なのか。』

「なるほど、当然の質問だね」

さつきも言ったとおりこの世界には個性という能力を使って社会に逆らう敵と、それらを止めるヒーローがいる。

球磨川くんにはそのヒーローになって欲しいのさ。

これが質問その1の答え、球磨川くんをこの世界に連れてきた理由。

水槽学園では英雄になれなかった球磨川くんだけど、多分この世界のヒーローにならなれるんじゃないかな。

なんとたつてこの世界ではヒーローっていうのは称号ではなく職業だからね。

これが質問その2の答えに繋がってくるわけだけど…

この世界には職業的ヒーローを育成するための学校っていうもの

が存在する。

その中でもいっとう優秀で最高峰と呼ばれる学校が、ついさつき球磨川くんに寄ってもらった雄英高校さ。

『なるほど…つまり、安心院さんは僕を異世界と呼べるような世界に転生（この場合はトリップかな？）させ、水槽学園の時の遊びの続きをしよう、って考えているわけだ』

「概ねそんな感じの認識であってるよ」

「今球磨川くんが言ったように君は異世界転生に近いことをしている。」

「ならば当然、転生特典と呼べるようなサービスがあつてしかるべきだとは思わないかい？」

『わお！』

『少年漫画なら“サンデー”より“ジャンプ”派、web小説なら“なろう”より“ハーメルン”派の僕が思わずテンションを上げてしまふような展開だ！』

球磨川くんが取つてつけたような反応をしてくる。

若干イライラさせられるが、まあいいや。

「特典は3つさ、1つ目はスキル付与だよ」

「僕の持つ7932兆1354億4152万3224個の異常性と4925兆9165億2611万0643個の過負荷、合わせて1京2858兆0519億6763万3867個のスキルから好きなのを1つあげよう」

『うわー、いつ聞いてもひどいスキル数だ』

球磨川くんが若干引き気味、といったような表情で… って危ねー、僕としたことが忘れるところだったぜ。

「言彦に殺されてから主人公（めだかちゃん）のスキルを目指して作り、失敗したスキル「模造盗（コピーライト）／他人のスキルを可もなく不可もなく模倣するスキル」でパクった「完成」とか「正喰者」とか「愚行権」とか、箱庭学園時代に出てきた全スキルも付与可能だぜ」  
『なんてこった、これはひどい』

なんとでもいうがいいさ。

それで、どのスキルがいいんだい？

『そうだねー..』

『「五本の病爪」とか「見囷刀」とかも捨て難いし、「完成」とかはそれこそチート級だ』

『どれにするか迷うなあ』

球磨川くんに関わり深いスキルを挙げてくる。

確かに球磨川くんが使うなら身近にあったスキルを使うのが良いのかもしれないね。

『.. うーん、よし！これに決めたたよ！』

そう言い三拍ほどためをつくる球磨川くん。

果たして球磨川くんはどのスキルを選ぶのか..

『僕は「独楽凶解（スピニングアングラー）」をもらうことにするよ』  
そう来るか。

## 特典

「独楽図解（スピニングアングラー）」

ダークヒーロー鶴喰鴟の戦闘の型、鴟システムの一角である回転を操るスキル。

鶴喰鴟本人は試したことはないが、地球の自転や公転すら操れるという恐ろしい異常性である。

「なるほど、そうくるか…。」

「つて、「完成」とか「見囷刀」とかはどうしたんだよ」

『いや、だってダサイじゃん』

なんでそんなこともわからないの？といったような（めちやくちやむかつく）表情をした球磨川くんが答える。

まあいいさ。

「んじゃ、付与するぜ」

「ん、ちゅ♡」

スキル授受のスキル「口写し」で「独楽図解」を渡す。

『ありがとっ…?!』

球磨川くんが顔を赤くして感謝を述べた、と思ったらそのまま倒れてしまう。

なんだ、恥ずかしくて頬を染めたのかと思ったぜ。

多分、ろくに調節もせず他人のスキルを受け取ったことによる反動のようなものだろう。

人吉くんは死んだり4ヶ月かけて修行をしてたからスキルに耐えられた（愚行権に関しては彼のためのスキルだからそもそも耐えるもクソもないわけだが）だけで、普通に生きてる脆弱な球磨川くんじゃ反動に耐えられなくて当然だね。

「二済適化（ニードレット）」

「しばらく休めば最適化が済んで自在に使える様になるさ」

多分。

数分経つと呼吸が整いだし数十分もすれば会話ができるようになった。

『手間をかけさせちやったね』

「ま、これくらいは特典付与の一部さ。」

「ちよつとスキルを診させてもいいかい？」

『え、あ、うん』

状況をいまいち把握出来てなさそうな球磨川くんが了解してくれた。

「診託（オラクルシーイング）」

「死運典（マイナストライバー）」

異常性「独楽図解（スピニングアングラー）」が球磨川禊の精神下において改悪、最適化されて誕生

主に運動を操る過負荷（スキル）

物理的効果に「回転と運動、ベクトルを操る」

精神的効果に「頭の螺子を緩める（締める）」がある

効果範囲は自分を含めた視界にうつる全て

「うげえ…」

いやいや、なんだよこのスキル。

頭おかしいんじゃないの？

「独楽図解」の完全上位互換、こんなもの持つてるだけ戦闘においてはトップクラスになれるだろうよ。

しかもその上、球磨川くんのスキルはこの「死運典」だけじゃない。

それぞれチート級の「大嘘憑き」と「却本作り」がある。

チートスキル×3か、さすがは元箱庭学園のジョーカー、とでも言えばいいのかよ…

まったく、笑えてくるぜ。

まあ球磨川くんをヒーローにする上で正統派戦闘スキルがないのが痛いところだったし結果オーライかな。

正統派と呼べるかは怪しいところだけだな。

『どうしたの、安心院さん？』

目に見えて動揺していた（であろう）僕を見て球磨川くんが心配したような感じで尋ねてくる。

「あとで詳細は教えるけどさ、とりあえず。」

「球磨川くん、君には過ぎた能力だ」

『安心院さんってばひどいなあ』

『それはそうと、特典ってまだあるんだよね?』

僕の忠言を戯言だと思ったのか、それとも「死運典」の凶悪性に自覚があるのか、僕の言葉を若干スルーしながら聞いてくる。

ま、僕の発言で戯言じゃない言葉なんて割と少ないけどさ。

「もちろんさ」

「ただ、これ以上時間をかけるのは惰性だから巻いていくぜ」

「身変整理（スペックチューン）」

指を鳴らしスキルを発動させると球磨川くんの体が発光する。

RPGゲーム（正しくはRPGゲームまたはRPGだが）においてのレベルアップのような光景だ。

「球磨川くんのスキルを全て、チューンアップしておいたぜ」

「早い話、君のスキルを全強化しておいた」

「スキルの強化、これが2つ目の特典さ」

『確かに、またなんか調子が悪くなってきたような気がしないでもないな』

球磨川くんがまたフラフラしだす。

「これで最後の特典だから気を保ってな」

「いくぜ、プラス補正のスキル」

「さらに向こうへ（Plus ultra!!）」

フラフラしている球磨川くんの左頬めがけて右拳を振りかぶる。

割と強めの拳がクリーンヒットした球磨川くんはそのまま後方（僕から見たら前方だが）へ吹っ飛ぶ。

『うーん...』

目を回して倒れている球磨川くんはなじみ荘の一室にでも突っ込んでおけばいいだろう。

ふう、とりあえずこれでスタートラインに立ったってところだろうか。

さて、次回は修行パートってところかな。





## 説明2

球磨川くんが気を失ってから一晩が過ぎた。

球磨川くんが目覚めたのは気を失ってから数時間後のことだったけれど、その頃には日も暮れ球磨川くんも目覚めただけ(体力の限界)だったため安心院さん印の夕飯をご馳走してあげてもうひと眠りしてもらった。

「つまり今日から修行パートってわけさ」

少し気だるそうに白い長Tとスラックスで寝癖を直している球磨川くんに伝える。

『OK...』

『ただその前に、昨日くれた特典について詳しい説明をしてくれんじやなかったっけ？』

「おっと僕としたことが失念してたぜ... なーんて、冗談だからその呆れたような表情をやめるんだ。」

「可愛げのない弟くんだよ、まったく...」

「それはそうと、君にあげた特典の話だっけ？」

「例のごとく、というかなんというか... 言語によるコミュニケーションってのはなんとも不自由なものだよ」

というわけでモノローグ院さんの登場ってわけさ。

『あ、うん。』

...

まあいいさ。

君にあげた3つの特典、それは...

- ・スキル付与
- ・スキル強化
- ・人格補正

この3つなわけだ。

で、まずはスキル付与についてなんだけど。

君が欲したスキルは「独楽凶解(スピニングアングラー)」という極めて善良かつ真つ当な異常性(スキル)だったわけだが、いつだっ

たか「手のひら瞬し(ハンドレットガンレット)」を「大嘘憑き(オルフィクション)」へと改悪したように、超良心的であった異常性「独楽図解(スピニングアングラー)」は非常に凶力な過負荷へと変貌をとげた。

その名も「死運典(マイナスドライバー)」  
「独楽図解(スピニングアングラー)」が君の精神下で改悪され生まれ  
た過負荷だ。

主に運動を操る過負荷であり非常に非常に応用が効くものと考えられる。

物理的効果に「回転と運動、ベクトルを操る」

精神的効果に「頭の螺子を緩める(締める)」

これらの効果が最低でもあると考えられる。

つてことは…… まあそういうことだ。

球磨川くんの発想次第でいくらでも化ける可能性があるってこと  
さ。

ちなみに効果範囲だけど、大嘘憑きと同じく自分を含めた視界にう  
つる全てのものだよ。

『へえー』

『まあつまり』

『僕(君)には過ぎた能力ってことか(だ)』

「わかってくれたようで何よりだ。」

どこかで気合のスイッチが入ったのか、いつの間にか学ランに袖を  
通した球磨川くんがノリノリで真理をついた。

真理というか自明の理ってやつなんだけどな。

気を取り直してモノローグ院さんだ。

残る2つのスキルのうちの1つ、「スキル強化」について話そう。

修行パートに本格的に突入すれば自ずとわかる、それこそ自明の理  
であるわけなんだが……

端的に言うところ「大嘘憑き(オルフィクション)」と「却本作り(ブツ  
クメーカー)」の能力の幅を広げた。

勘違いして欲しくないのが、別に君のスキルの威力だったり出力の  
強化をしたわけじゃないってこと。

スキルの（特に過負荷の）威力出力の強化はその者の人格のマイナス度合いによって決まると思っていて欲しい。

例えるなら、だ。

君の高校時代の仲間に「江迎怒江」って子がいたろ？

彼女の過負荷「荒廃した腐花（ラフラフレシア）」のスキル強化をしたらどうなるか、って話なんだが、

仮に威力出力の強化を行ったとすると、モノを腐らせるスピードが上がったり量とかが増えるたりする、と予想できる。

それは威力出力の強化ってのが現在のスキルの延長線上にあるもの、延長線を引くことのようなものだからなんだ。

逆に球磨川くんに行ったスキル強化と同じものであれば、直接手に触れなくても視界に映るあらゆるものを腐らせられるようになる（当然ON/OFFは保たれたまま）とかそんなところかな。

つまり現在のスキルに延長線を引くのではなく、まったく別の方向に新しい線を引く、っていうようなイメージだ。

だから「スキル強化」は端的に言うところ「能力の幅を広げること」を指すわけなんだけど。

ここまで理解してついて来てくれると嬉しいが、まあわからなくてもいいよ。

見ればわかると思うからさ。

大嘘憑き（オールフィクション）

『なかったこと』にしたことを『なかったこと』にできる。

また、上記をさらに『なかったこと』にできる。

『なかったこと』を永久に重ね続けられる、ってことさ。

それに加えて制限時間を0〜∞で設定できるようにもなっているよ。うだね。

この制限時間ってのは『なかったこと』にしていられる時間と『なかったこと』をなかったこと』にしていられる時間の両方を指すよ。

早い話が強化された大嘘憑き（オールフィクション）の能力全てに制限時間を設けられるようになったってことさ。

この話のミソは「制限時間」すらも『なかったこと』にできるところだ。

例え話をさせてもらおう。

君が目の前にあるリングを5分の制限時間を設けて『なかったこと』にしたとしよう。

このまま君が何もしなければリングは5分後に元通りになる。

しかしだ、仮に2分経過したところで「制限時間」を『なかったこと』にしたとするとその時点でリングは元通りになる。

ここでキーとなってくるのは『なかったこと』が永久に重ね続けられるようになったということさ。

つまり、5分の制限時間を設けて『なかったこと』にしたリングを2分経過した時点で元に戻す(制限時間の残り3分が『なかったこと』になる)、そのあとにもう1度「制限時間を『なかったこと』にしたこと」を『なかったこと』にする」ということをするとリングは残った3分の制限時間を持ってもう一度『なかったこと』になる。

① 5分の制限時間を持って『なかったこと』にする(5分経過すると元に戻る)

② 制限時間のうち2分が経過した時点で”①”を『なかったこと』にする(制限時間の終了待たず元に戻る)

③ ”②”のあとのどこかのタイミングで”②”をなかったことにする(残った制限時間が経過すると元に戻る)

※この時『なかったこと』にすること(①)のみに制限時間を設けられるわけではなく、『なかったこと』を『なかったこと』にすること(②)にも制限時間を設けられることに注意だ。

正直球磨川くんごときの頭脳じゃこのスキルは扱えない、そんな気がするぜ。

『いやいや、なるほどねー』

『つまり、だ。』

『安心大嘘憑き(エイプリルフイクション)と虚数大嘘憑き(ノンフィクション)を足して2で割らず、むしろ2乗したようなスキルってわ

「けだね」

「なん…だと…」

まさか球磨川くんごときの頭脳で理解ができるとは…

別に理解出来たから扱えるかって言ったら決してそんなことはない、としか言いようがないわけだが。

それでもあの球磨川くんが正しくスキルを理解しているとは…

やっぱり「プラス補正のスキル」あれが効いているのかもしれないね。

『それで？あとなんか特典あつたよね？』

『人格補正、だっけ？』

『突然変なスキルを叩き込まれて人格が補正されてるなんて僕じゃなかったら人権団体に訴えられてるぜ』

「ん、球磨川くんがそこまで覚えているなら話は早い」

「昨日の夕方、君に叩き込んだのは「プラス補正のスキル」だ」

「その名も「さらに向こうへ（Plus ultra!!）」

さらに向こうへ（Plus ultra!!）」

対象の人格をはじめとしたあらゆるステータスにプラス補正をかけ、プラス成長をさせるスキル。

「結果的に君の君らしさを減らす、マイナス方面への弱体化をさせてしまったわけだが…

「君が職業的ヒーローとなる上で、ごく普通のノーマルな青少年達と関わる機会を避けることはできないだろ？」

「その時にまともなコミュニケーションもできないようじゃ困るってわけさ。」

「他ならぬ僕がね」

『んー、なるほどね』

『まあ致し方ないってやつなんだろうね』

『いざって時は大嘘憑き（オールフィクション）でどうにでもできるだろうし』

『大した問題じゃないよ』

「そう言ってくれて何よりだぜ」

「ここまで何か質問は？」

『特にはないかな』

「ないならいいよ本番だ」

修行パートの始まりだぜ

ん？

「却本作り（ブックメーカー）」の強化はどうしたって？

あんな禁断（笑）のスキル、強化する隙間がないよ。

まあ、せいぜいちよつとだけ「却本作り（ブックメーカー）」という概念を理解しやすくしてあげた、その程度の強化だよ。

どう理解しやすくなったかは球磨川禊のみぞ知るってやつだろうね。

## 出会い

「はあ… はあ… っー」

失敗です、大失敗をしました。

街で見かけた好みの男性に襲いかかり（性的な意味は無いです）なぶりいたぶり多量の失血をさせて、ようやく切り刻もうと、初めての殺人を完遂させようとした、その瞬間のことです。

その瞬間、爆炎が襲いかかってきました。

死にかけの男がいたからか、私の見た目から侮ったのか、炎はかなりの低温で直撃をとっさに避けた私は腕に軽い火傷を負うだけで済みました。

まあ、その時は。 ってだけなんですけどね。

あれから15分くらいでしょうか？

ずっと逃げ続けています。

追ってきているのはエンデヴアーとかそんな感じの名前のナンバー2ヒーローみたいです。

炎を操る個性みたいで接近戦が取り柄の私には少し、というよりかなり荷が重くて体中が煤だらけになってます。

ところで、あんな気難しそうでヒーローよりむしろヴィランみたいな顔つきをしてるくせにナンバー2ヒーローで、しかも名前が「努力（エンデヴアー）」って… 面白い人ですね。

まあ、どうでもいいんですけど。

なんで私がこんな現実逃避めいた考えをしているかというのと、

「追い詰めたぞ… ヴィランめ！」

絶対絶命のピンチだからです。

崖っぷちです。

もちろんそれは比喻表現で実際にはただの袋小路ですが。

人間、どうにもならなくなると冷静になると本当ですね。

冷静な頭でここまでの状況を振り返ってみても、まったく意味がわかりません。

せっかく色々準備して、ヒーローに見つかりにくく穴場スポットとか

上手な逃亡生活の送り方とかたくさんお勉強して、ようやく殺してあげられると思ったのに、むしろ殺されかけてるなんて…

まあ、ヒーロー相手だからさすがに殺されるなんてことはないと思うんですけどね。

だけど、なんであんなところヒーロー、しかもナンバー2ヒーローがいたんですかね。

きつと一生の謎です。

その一生ももうすぐ終わると考えると感慨深いものがあります。

そんな感じで私が追い詰められ生きることが諦めようとした、その時です。

『おいおい、マジかよ』

『父親並の年齢のおっさんがうら若き女の子を煤だらけって…』

『まったく、ヒーローは何してるんだか』

傷だらけの王子様が救いに来てくれたのは。

『煤だらけの女の子（シンデレラ）は時代遅れだぜ？』

『今の時代は素足JKだ』

「追い詰めたぞ… ヴイランめ！」

相手はただの弱小ヴィランだった。

おそらく最も優秀な息子と同じくらいの歳の、それも女だった。だから油断し甘さがあったのか、と言われると否定はできない。

そもそも今回雄英高校の周辺にある裏路地をパトロールしていたのは、先日雄英高校に侵入し校舎全壊（なぜか直っていたらしいが）とプロヒーロー複数名に精神的ダメージを与えるという暴挙に出たヴィランを警戒していたためだ。

奴の名はスパイラル。

螺子を操り多数のプロヒーローを一蹴し、あのオールマイトとも互角にやり合った奴に名付けられたヴィラン名だ。

そんな凶悪ヴィランを警戒していたから余力を残しておきたくて、いつ奴が襲ってくるからわからないから警戒をして、だから女ヴィラ



ンへの追求の手をやや弱めにしていたと、そんな言い訳をしようのはプロ失格かもしれんが…

『おいしい、マジかよ』

『父親並の年齢のおっさんがうら若き女の子を煤だらけって…』

『まったく、ヒーローは何してるんだか』

目の前にいる男は思わず、咄嗟に、そんな言い訳を考えてしまうほど異常であった。

『シンデレラは時代遅れだぜ?』

『今の時代は素足JKだ』

眼帯じみたマスクに学ラン、両手に持っている螺子。

十中八九スパイラルだろう。

「貴様、そこをどけ」

「これ以上私の仕事を邪魔するようなら、ヴィランとして処理をするぞー!」

しかし、まだその確証はない。

とりあえず公務執行妨害でしょっぴいて雄英高校での暴挙についてはその後裏を取れば良いだろう。

『んー、それはできない相談だ。』

『理由は3つ』

『1つ、僕は弱い者の味方だから傷ついている女の子を見捨てることはできない。』

『2つ、最近覚えた技の復習をする必要があるから』

『3つ、僕が主人公（ヒーロー）だからだ』

ヴィランごときがヒーローを自称するとは…

「何をふざけたことを…」

「その女もろとも消し炭にしてくれるわあああ!」

セーブするのをやめ、爆炎でヴィラン共を攻撃する。

前後左右上下、全方向からの逃げ場のない爆炎が奴らを包む。

「フン、他愛もない」

「なぜオールマイトの奴はこんなのに遅れをとっ……っ!?」

『滾る氷柱（ヒートアイス）』

『空気中の分子の運動を止めた。』

『ま、運動が0ってわけじゃないけど…』

『君の炎は、君の熱は、届かないぜ』

無傷の奴が笑っていた。

マスクがあるから顔が見えたわけではなく声の調子が、という意味だ。

熱を操る個性か…

確かに悪くない個性だ。

だが、プロは一芸だけじゃ務まらない！

「フンッ！」

間合いをつめ右のストレート、炎を纏った激熱のストレートを奴へ放つ。

…が、拳は届かない。

『彼方通行（ディレクションスカラー）』

『激熱のストレート（笑）のベクトルを彼方へ』

攻撃は届かずむしろ自分が吹き飛ばされた。

…なぜだ？

奴の個性は熱を操るだけじゃない？

息子のように複合個性か？

むしろ全く別系統の個性を応用して使ってる…？

そういえば最近覚えた、とさつき言っていたな…

ふむ、ならば…

…いや、考えていてもしょうがないな

「スパイラル…」

「さつき貴様は『僕はヒーロー』と言ったな」

「ならばなぜ」

「なぜ、貴様は暴れている！」

ヴィランの手の内がわからなければ出来る限り足止めをし援軍が来たら物量戦を仕掛ける。

不本意ではあるが、雄英の校舎を一瞬で破壊しオールマイトと渡り

合った奴を捕らえるのであればこれが上策だろう。

『ん、理由？』

『理由ねー… 特にないけど』

不気味に奴が答える。

「つ… ならば聞くが、『僕はヒーロー』とはどういう意味だ」

『いや、それはものたえというかー』

『安心院さんの病気がうつったというか…』

「安心院さん… そいつの差し金か？」

『あー、いや…』

『ふむ、これは困ったなー』

『安心院さん』というキーワードを手に入れ少し浮ついてしまったのかもしれない

今日の俺は最高峰プロヒーローとしての自覚、覚悟などがかけていたのかもしれない

さつきと同様言い訳をしてしまうが、しかしあれは言い訳のしようがない、正しく「油断」というやつだったのだろう。

『よし、この話はなかったことにしよう！』

名案のように言ったやつとのセリフの意味を深読みしているうちに

『運動の慣性（フィジカルセンス）』

『出る杭に撃たれる（カウンターリアクション）』

『僕の運動能力と視界中の慣性の法則、作用反作用の法則を操る』

『じゃ、ヒーロー（笑）』

『消えな』

無数の螺子を体中にたたきこまれる。

その場に留まろうとするが、螺子の勢いに押され街の大通りの方へ飛ばされる。

ビルに縫いつけられ、そして意識を失った。

---

『やっやて…』

ナンバー2ヒーローを無傷で退けたその人はいつの間にかに傷を

治して私の方を見ている。

なんで傷だらけだったんだろ…。なんてくだらないことを考えてしまいがら、私を意を決して話しかけた。

「あ、あのー！」

『ん、なんだい？』

「わ、私を、トガを、連れ去ってくれないですか？」

『…』

ダメですかね？

やっぱり突然こんなことを言われても困るですかね？

私が意を決して口走ってしまったことに焦り不安を抱いていると、少しの沈黙のあと彼が口を開きました。

『ふむ、これは…。安心院さんの言えばルート分岐イベントってやつかな？』

なんの話ですか？

## 修行

「なるほど、それでその子連れれてきたってわけだ。」

王子様（仮）に連れてこられた先のアパートで待っていたのはちよつと年上のお姉さんでした。

話を聞いてわかったんですが、王子様（仮）の名前は『球磨川禊』さんと言うそうです。

お姉さんの名前は「安心院なじみ」さんと言って「親しみをこめて安心院さんと呼びなさい」

あだ名は「安心院さん」さんというようです。

『あー、それでさ。』

『この子、トガヒミコちゃんだっけ?』

『トガちゃんの処遇はどうしたらいいのかな?』

「んー、いいんじゃないかな?」

「どっちでも、いいんじゃないかな。」

「彼女のしたいように、彼女の好きなようにやらせてあげてもあげなくても、君への影響はたいしてないよ。」

『ふーん、そうなんだ』

『じゃあ、聞くけど、トガちゃんはどうしたい?』

クマ様と安心院さんとの間で話が決まったようです。

といつても、ノープランで攫われてきた私の処遇は私で決めろ、ということが決まっただけみたいですけど。

まあ、そんなことは決まっています。

「私をここに住まわせて!」

「…くれませんか!!」

つい、いつもの口調になりかけたけど、とりあえずどうしたいかは伝えました。

命の恩人にして奇跡の王子様、そんな人に出会えたんだから攫われただけで帰るわけには行かないですよ!

「なるほど、なるほど」

「じゃあ改めまして自己紹介とはいかがか」

「僕の名前は安心院なじみ。」

「親しみをこめて安心院さんと呼びなさい」

「その球磨川くんとは姉弟みたいな関係だよ」

安心院さんがクマ様の保護者のような存在のようです。

『僕の名前は球磨川禊』

『僕の話は、なんて呼んでも構わないよ』

『実は髪型は両側を団子にしている、団子は付け根がハネている個性豊かな女の子がタイプなんだ！』

「うわあー」

安心院さんが形容し難い表情でクマ様を見ているのですが、関係ありません！

アピールチャンスですな！

「トガヒミコ、15歳です！中学三年生です！」

「好きなタイプは血の香りがしてボロボロな人です！」

「クマ様に出会えた時が、私の人生の中で最も輝いていた瞬間でした！」

「クマ様とこれからもずっと一緒にいることで私の人生はもっともつと輝いていくと思います！」

「あ、別に独りよがりな思っただけというわけじゃなくて、クマ様のことが大好きでその愛が先にあるんですけど」

「これからどうか、よろしくお願いします！」

「うわあー、うわあー」

『安心院さん、そんな目で人を見ちゃいけないぜ？』

思いを伝えきったのは良いものの、受け入れてもらえるか不安だった私にクマ様は手を差しのべてくれて

『これからよろしく、ヒミコちゃん』

そう言ってくれました。

「初めての出会いから数時間もたっていない年下の女の子を下の名前で呼ぶのはどうかと思うが」

「それももうすぐお酒を飲めるようになる浪人生が言うのはどうかと思うけど」

「ま、鬼愛お似合いのカップルだよ」

保護者公認のカップルになりました！

嬉しいです！

「よし、じゃあ修行再開と洒落こもう」

ヒミコちゃんを加え修行を再開する。

球磨川くんにはこの間からと同じ修行をしてもらい、ヒミコちゃんには自分のスキル（こっちでは「個性」か）の把握と発展についてを  
考えてもらおう。

『うーん、難しいなあ』

相変わらず球磨川くんは苦しんで修行をしている。

「クマ様は一体なにをしてるんですか？」

「んー、球磨川くんはね、高校物理の勉強してるのさ」

「彼のスキル… あー、君らのいうところの個性、それには物理法則に  
対する一定以上の理解が必要だからね」

「そうなんですか！」

「さすがクマ様です!!」

彼の、球磨川くんのスキル「死運典（マイナスドライバー）」は主に  
運動を操るスキルだ。

このスキルを使えば、例えば高校物理で習う「速度加速度」や「慣  
性の法則」、「作用反作用」などの「運動」を操ることができる。

が、しかしだ。

「速度加速度」にしろ「慣性の法則」にしろ「作用反作用」にしろ何に  
しろ、その運動や運動に関わる法則や概念を理解していなければ使え  
ない。

もちろん、彼のスキルは過負荷（スキル）であるのだからそれぞれ  
の法則の公式やら定義を暗記しいちいち計算する必要は無い。

むしろ、名前や大まかな概念を理解していればある程度はきちんと  
使えてしまうだろう（ここが過負荷の過負荷たる所以のひとつと言え

る)。

それなのになぜ球磨川くんが頭を抱えながら机に向かつて勉強をしているかといえ、答えは単純だ。

球磨川くんのオツムがニワトリ未満の粗大ゴミだから、さ。

早ければ高校1年(学校によっては中学生の時点で習うかもしれない)で習い理解できるような概念を連日頭を抱えながら必死に理解しようとしている(放)浪人生を見ているとさすがの安心院さんの目にも涙だ。

そんなことより、球磨川くんの残念なオツムの話より、ヒミコちゃんの個性についてだ。

「ヒミコちゃんの個性ってどんなものなんだい？」

「はいー！」

「私の個性は、人の血液を摂取するとその人の容姿と身体能力を一時的に手にいれられる、っていうコピーの個性ですー！」

「もちろんそれだけでなくてですね、条件や副作用があるんですー！」

「個性を発動する時に摂取する血液の量は極少量でも構わないですけど、私と比べて体格とか身体能力で大きな差があると個性の持続時間が短くなって無理に使い続けると倒れてしまいますー！」

「逆に体格や身体能力に近い人が相手だと長く個性が発動し続きますし、負担もあまり大きくないですー！」

なるほど、彼女はきちんと自分の個性のメリットデメリットを把握しているようだね。

これなら話は早い。

「ヒミコちゃん、君には個性のレベルアップをやってもらおうよ」

「個性のレベルアップ、つまり個性の発展を身につけてもらおう」

「個性の発展、ですか？」

そう、ずばり

「個性をも、コピーする個性に発展させる、ってことさ」

「容姿や身体能力だけではなくね」

ヒミコちゃんが驚愕と困惑に目を見開き、球磨川くんが何か言いたげにこちらを見ている。



「なんだい、球磨川くん」

「勉強でわからないところがあつたからつてすぐに人に聞いちや意味がないんだぜ？」

『いやいや、勉強の話じゃないさ』

『まあわからないところはあつただけどー』

『そうじゃなくて、”個性”つてやつはそんなに簡単に変化するものかい？』

『もちろん、”水を操る個性”で”体内の水分を外に出して操る個性”だと思つたら”空気中の水分を操る個性”だつた、とかならわかるけどさ』

まあその場合は変化というより単純にそいつが間抜けだつたつてだけなんだけど・・・球磨川くんの疑問ももつともだ。

「そうだね、球磨川くんが思っている通り”個性”つてやつはそう簡単には変化しないよ」

「ただ、この世界における特殊能力である”個性”は、”個性”という能力である以前に人間性という意味での個性であり、個人固有の身体能力であり、何より僕がばら撒いたスキルだ」

と言つてもスキルと違つてしっかり遺伝するし基本的に死ぬまで使える能力ではあるんだけどね。

「まあつまりだ」

「”個性”つてやつは強い影響を受けることで変化する可能性が高い」

「これがこの世界固有の特殊能力であつたのなら話は別だけど、この世界の”個性”はあくまでスキルが素となつているものだ。

「要はマイナス成長をするつてことさ」

『なるほどねー』

『でも今の僕つてそんな影響力ないんじゃない？』

『誰かさんが不意打ちで僕の人間性を捻じ曲げたせいだ』

へえ、そんなひどい奴がいるのか。

今度紹介してほしいね。

「おいおい、君の目の前にいる美少女がどこにでもいるただの外人

だっつてことを忘れてるんじゃないか？」

「僕の下で一生懸命修行すればマイナスにもプラスにも急成長間違いないさ」

『なるほど、なるほど』

『ヒミコちゃん、大丈夫？』

ヒミコちゃんの顔がちんぷんかんぷんといったような表情で固まっている。

「そんな顔をしなくてもいいじゃないか」

「安心しな、安心しなよヒミコちゃん」

「僕の言う通り修行すればレベルアップ間違いなしだぜ」

安心院さんだけにね！

## 出会い2

時が経つのは早いもので、気がつけば球磨川禊がトガヒミコと出会ってから2ヶ月が経ち8月になっていた。

安心院なじみは庭で草むしりを、トガヒミコは精神世界で僕と修行中だ。

ちなみに、僕ってのはもちろんみんなのアイドル安心院さんさ。

まあ、このいわゆる地の文は半一人称半三人称的などころあるからね。

わかりにくかったら申しわけない。

それはそうと、彼は何をしているのかというと、球磨川禊は何をしているのかというと、だ。

彼は現在おつかいに行っている。

そうだね、多分海に洗濯でもしに行ってるんじゃないかな？

もちろん、汚れきった心の洗濯さ。

「はあ... はあ...」

今日も海浜公園に来てゴミ掃除をしている。

今日はオールマイトがいない日だ。

オールマイトは、彼は一流のプロヒーローだから当然僕のことをつきつきりで見してくれるわけじゃない。

体を動かす訓練は超回復のことも考えて2日おき、そのうちオーマイトがみってくれるのは3回に1回（つまり大体週に1回）だけだ。

オールマイトがいない間、僕はできる限りのことをしている。

オールマイトに渡されたトレーニングプランは、あくまで僕が雄英の入試を突破するためのもの。

つまりそれを守って訓練をしているだけじゃダメなんだ。

雄英には入れるかもしれない、でも一流のプロヒーローにはなれないかもしれない。

だから僕はトレーニングプラン以上の訓練をやっている。  
・・・ オールマイトには悪いけどね。

そんなことを考えながら休憩をしていると、僕の目の前に男の人が立っていた。

『やあ』

『こんなところで何してるんだい？』

白いTシャツに黒いスラックスを履いた男の人が軽く笑いながら尋ねてきた。

「や、あ、あの・・・」

「ゴミ掃除をしていますー！」

僕がそう言うとその人は

『ふーん・・・』

『：海浜公園に溜まった異常な量のゴミを掃除する、それも1日で終わるような量でもなく、君が行動を起こしたのも今日が初めてというわけでもなさそうだ』

『これは掃除っていうより、むしろなにかの訓練みたいだね』

と、やたら正確な分析をしてきた。

「は、はいー！」

「実は・・・ ゴミ掃除をしながら体を鍛えているところでした・・・」

「あの、お兄さんは何をしに来たんですか？」

『へえ』

『面白いね』

『この量を体を鍛えるために掃除する、か』

『どこかで見たことがあるようなないようなトンデモトレーニングだね』

『ん？僕？僕は普通に海水浴に来ただけだよ』

『まあ、気が変わったんだけどさ』

何が面白いのか、少し笑いながら明後日の方向を見て何かを考えているような仕草をして男の人はそう言った。

それを少し不気味に思いつつ、なぜかその場から動けなかった僕は気がつけばその人の話に引き込まれていった。

『トレーニングを始めてからせいぜい… うーん、4〜5ヶ月つてところかな?』

『大体中学生くらい年齢、個性は4歳までに発現するらしいしこの年齢の子が突然トレーニングを始めるのは、いささか不自然と言える』

『つまり、君は今年の春頃に何かトレーニングを始めるようなきつかけと言えるような出来事にあい、この暑い中1人で海浜公園の掃除をしているわけだ』

『でも、中学生の男の子がトレーニングとして思いつけるのはせいぜい筋トレやランニング程度だろうし、少なくとも海浜公園のゴミ掃除をするなんてのは思いつかないだろうね』

『そのことを考えると春頃にあつたきつかけと言えるような出来事は…』

『師匠と呼べるような人との出会い、だろうね』

『ついでに言えばこのトレーニングの効果について考えれば、君の個性は単純増強型か、もしくは… 無個性だ』

『どう? 当たってるかな?』

「〜っ?!?」

衝撃で声が出ない。

それこそ初めてオールマイトに出会った時以上の衝撃だ。

なぜかって目の前にいる男の人が予想のようにつらつらと述べていた、その全てが当たってたからだ。

『あれ、どうかした?』

男の人がにつこり笑いながら優しげに話しかけてくれたおかげでなんとか落ち着きを取り戻す。

「大丈夫です!」

「お兄さんの言う通りなんです、どうしてわかつたんですか!?!」

まあ落ち着きを取り戻せたからと言って落ち着いて話すことが出来たわけじゃないんだけど。

『んー、僕には人の弱いところがその人自身より、よくわかるんだ』  
『それこそ手に取るように、ね』

『まあだからその特技を使ってちよつと予想してみただけだよ』

『この程度のこと、たいしたことじゃないさ』

『それより提案なんだけど…』

『君の事情を話してくれないかな？』

『きつと力になれると思うんだ！』

そう言われ、気がつくと事情をほとんど全て話してしまっていた。

ヒーローになりたいこと、でも自分は無個性だから諦めかけていたこと、そんな時師匠に出会って道を示してもらったこと、訓練で体を鍛えれば師匠から個性を手に入れさせてもらえること…

もちろん、オールマイトのことは黙っていたけどね。

『なるほどねー』

『いや、僕の知り合いにも君の師匠によく似た人がいてね』

『スキルを人に渡せる人や一晩で強敵を打ち倒せるようになるトレーニングができる人とか、中には体を弄ってスキルを発現させられる人とかもいたよ』

『あと君のように、スキルを持っていないけれど訓練の末大きな力を手に入れた人とかね』

『あー、スキルってのはいわゆる“個性”のことさ』

指を折りながら話をしてきている。

どうやら男の人の知り合いにも僕やオールマイトのような人がいるらしい。

『さっきも言ったように僕には君の弱点がよくわかる』

『そして、君のような事例に出会ったこともある』

『だから君のトレーニングに手を貸したいんだけど』

『どうかな？』

そう言つて男の人は手を差しのべてきた。

「こちらこそ！よろしくお願いしますー！」

自分でも不思議に思うほど、いつの間にか男の人を信用していたらしい。

僕は全力でその手を取った。

でも僕には少し気になることがある。

「あの、でも、お兄さんはどうして協力してくれるんですか？」  
「初対面で、しかも無個性の僕に…。」

そう、どうしてこんなによくしてくれるのか、っていう疑問だ。  
普通に考えれば初対面でしかも無個性の中学生の訓練の手伝いなんてしようと思わないだろう。

いくら僕のような人が知り合いにいるからって少し変だ。

『うーん、理由?』

『そんなの決まってるよ』

『それは僕が弱いものの味方でありたいから、ってだけさ』

『あ、言い忘れてたね』

『僕の名前は球磨川禊、親しみをこめて… あー、うーん…』

『ま、適当に呼びやすい呼び方で呼んでね!』

「あ!」

「僕の方こそ申し遅れました!!」

「緑谷出久といいます!」

「これからよろしくお願いします!!!」

『こちらこそよろしく、出久ちゃん』

「おかえり、球磨川くん」

『草むしりお疲れ様、安心院さん』

僕が草むしりをしていると、なにやら楽しそうな顔をした球磨川くんが帰ってきた。

「やけに楽しそうだけど、なんかいい事でもあったのかい?」

『わかっているくせにそういうこと聞くあたり安心院さんって本当に性格良いよね』

『たいしたことじゃないよ』

『安心院さんの言う通り海水浴に行ったら面白い子と出会えたってだけさ』

まあ球磨川くんの言う通り僕は全部見てたからね。

この世界に僕らが介入しなければおそらく主人公になっていた少年、緑谷出久くんか…

もちろんこの「主人公」ってのは比喻でも何でもなく、めだかちゃんと同じ文字通りの「主人公」さ。

いやまあ、そもそも「主人公」っていう表現は僕が造った造語的側面があるから比喻といえれば比喻なんだけど、まあどうでもいいね。

『そんなことよりヒミコちゃんの修行の方はどんな感じー？』

「んー、上々つてところだよ」

「個性の修行もあるから人吉くんの時よりスローペースではあるけれど、彼女のスペックは反則王鍋島猫美以上、人吉くん以上の逸材だよ」

『鍋島猫美？』

『誰それ（笑）』

『それってすごいのか？』

これを素で言っているのか冗談なのかがわからないのが球磨川くんの面倒なところだよな。

いや、これは球磨川くんに限らず過負荷全般に言えることなんだけど。

まあいいや。

「この世界基準でいうなら、そうだな… 僕が鍛えずとも、”個性”を使用せずとも、二流プロヒーローなら叩きのめすことが出来るくらい、って感じかな」

「僕らの世界風というなら、”すばしっこい阿久根高貴”って感じさ」  
『なるほど、それはすごいね』

本当にわかっているんだろうか。

不安になるけど、正直球磨川くんには関係ない話だしね。

わかっているなくてもいいんだけどさ。

『さて、僕はそろそろ昼寝でもしようかな』

「ちよっと待ちなさい。」

現在時刻はお昼を少しまわったくらいで、球磨川くんの今日のノルマはまだ終わっていない。

ていうか緑谷出久に会いに行ってもらっていたからまだひとつも



こなしていないはずだ。

いまだにベクトルをしつかり理解出来てない身分で昼寝ができると思っ『おいおい、止めないでくれよ』

『睡眠つてのは存外バカにできない、重要なものなんだぜ?』

『今日1日草むしりだけやっていたどこかの誰かさんと違って、僕は外で見聞を広めて新しいことにチャレンジしてきたんだ』

『男は外で女は家で、なんて古い考え方を押し付けたいわけじゃないんだけどさー』

『普通に考えればわかることなんじゃないかなー』

『普通にさ』

『それがわからないってことは自分がバカだって言外に示してるってことになると思うんだけど、安心院さんってもしかしてそこまで考えずに・・・って、うあっ!』

むしっていた草を投げつけるが外れ、地面を抉る。

『あれ、もしかして怒ってる?』

『ていうか今のどうやってやったのさ』

『落ち着こうよ、安心院さん』

『話せばわかっ・・・!』

また外れ、今度は庭に生えてる木に突き刺さる。

『いや、別に怒ってなんかないさ』

『ほらこんなに笑顔だろ?』

『怒ってはないけど、ちよっと目障り耳障りな羽虫がいてね』

『笑ってるって目が全然笑ってないよ!!』

球磨川くんは必死の形相で草を避けながら、ついに螺子を構える。

『いや、本当に全然怒ってないんだけどね』

『まあ、ただちようどいいからついでに修行しようか』

『いや、本当に、全然怒ってないんだけどさ!!』

球磨川くんをなじみ荘の一室に叩き込みそのまま修行に突入する。

『いやはや、モテる男はこれだから辛いね』

『安心して寝る暇もない』

安心院さんだけに、かい?

『いや、全然(笑)』

『ところで”いやはや” つて死語かな？』  
知るか。

## 緑谷出久：オリジン

『まあ、トレーニングだとか訓練だとか言っても頑張って努力する必要なんて』

『実はないんだ』

『今持っている力の使い方を変えるだけで十二分に戦えるようになるはずさ』

現在、球磨川くんと緑谷くんは修行（訓練？）の内容を決めている。

『ぬるい友情・無駄な努力・むなしい勝利』

『それが僕のモットーだからね』

果たして修行が始まるかどうかは… 神のみぞ知るって感じかな。

いや、まあこの世界の神は一応僕なんだけどさ。

「でも、努力をしないで強くなれるんでしょか…？現場で活躍しているヒーローですら日々血反吐を吐くような努力をしていると聞きますし… 無個性で中学生の僕が努力をしないで本当に『と、言いたいところなんだけど』

緑谷くんがブツブツ言っていると思ったら、久しぶりの球磨川節だ。

『実は、僕も今一生懸命修行をしているところでね』

『いや、アイデンティティが迷子になっているとか言われかねない話なんだけどさ』

『ま、それはそれで良いとして』

『出久ちゃん、君には過負荷式<sup>マイナス</sup>、欠点を伸ばす修行<sup>マイナス</sup>をしてもらうよ』

ただのお勉強会のくせしてなぜ自嘲気味に「一生懸命修行」とか言えるのか、僕にはちっとも理解できないね。

いや、『かつては混沌よりも這いよる過負荷とまで呼ばれた僕がね…』みたいな意味の表情なんだろうけどさ。

血反吐を吐くような努力をしまってからそういう顔はして欲しいものだよ。

「欠点を伸ばす…?」

『そう、モノを腐らせてしまう、傷を開いてしまう、痛みを押し付けてしまう、そんな人間性における弱さを、欠点を伸ばすのさ』

『それで、君の話なんだけど』

『伸び代と未来しかない出久ちゃんの話なんだけど』

『君の欠点は無個性であることであり、さらに言えば非力であることだ』

江迎怒江、志布志飛沫、蝶ヶ崎蛾々丸、いつか球磨川くんと肩を並べて戦った彼らの過負荷と緑谷くんの無個性を並べて考えるのは少しズレているような気もするが、まあ球磨川くんの語りはいつも詭弁だからな。

ま、気にしたら負けだね。

「でも…どうやって…」

『下を向いたらいけないぜ?』

『いや、僕を見ろって意味じゃあない』

『下でも僕でもなく、きちんと”自分自身”を見るんだ』

そう言って、無駄に良いことを言って球磨川くんは言葉を切る。

そして少し意地悪そうに（いや、偏見やら色眼鏡やらではなくマジだ）笑い、驚くほど真面目な声で続けた。

『個性があつて恵まれていて希望に溢れた幸せな奴らと同じ土俵に立って、正道で努力して勝つ必要なんてないのさ』

『卑怯で邪道で負け越しても、最後に白星をあげることができるんだよ』

『少なくとも僕はそうだった』

『負け犬だって勝ち組に勝てたんだよ』

「出久ちゃん、君だってそういう奴らに勝ちたいんだろ?」

——— 友達ができないまままで友達ができる奴に勝ちたい

努力できないまままで努力できる連中に勝ちたい

勝利できないまままで勝利できる奴に勝ちたい

不幸なままで幸せな奴に勝ちたい! ———

そう言っていたのがいつのことだかも僕には思い出せないが…

いや、言うほど昔じゃないな。

普通に思い出せるが：・あの日の君と今の君と、見た目や雰囲気、周りの状況が変わっても、君の本質は一分一厘も変わっていないみたいだね。

「はいー」

「勝ちたいです!!」

そして、そんな球磨川くんの言葉はいつだって弱者の心に突き刺さる。

『よし』

『じゃあさっそくトレーニングに移ろうか!』

「へ?」

雰囲気を変えるような明るい声とともに球磨川くんが投げたのは、球磨川くん愛用の螺子だ。

「うわっ!」

「そんなもの一体どこから出したんですか!」

緑谷くんが慌てて避け地面を抉る。

『ん?』

『あれ、言ってなかったっけ?』

『僕、暗器使いなんだ』

そう言いながらさらにもう一本投げつける。

「っ… そうなんですか!」

いや…

『いや、嘘だけど?』

まあ嘘だろうね。

螺子を投げたことで生まれた砂埃を目くらましに緑谷くんへ急接近した球磨川くんは、そのまま横蹴りで緑谷くんを吹っ飛ばす。

ちなみに、球磨川くんがいつも大量に取り出す巨大螺子は全部彼のポケットの中に入っている。

正確には、巨大螺子を砕いて生まれた破片をポケットの中に入れて、使う時になったら「砕かれた」という現実を『なかったこと』にして大きくして（というか元に戻して）いる。

「うぐっ…」

意識はあるが起き上がれない様子の緑谷くんは、球磨川くんが声をかける。

『君の戦い方、欠点の伸ばし方についてなんだけどー』

「は…はい…」

緑谷くんがお腹を抑えながら起き上がって答え、球磨川くんが指を折りながら説明をする。

『力がないから筋トレをする、不正解』

『力がないから相手の力を利用する、うーん三角』

『力がないから他のモノを力を利用する…』

『これが花丸、大正解だ』

『他力本願、それが僕の、過負荷僕らの正道だ』

言いながら球磨川くんは螺子をかまえる。

『これから半年間、僕とトレーニングする時は筋トレもランニングもしなくていい』

『ただひたすら、機転と周りの力を使って僕と戦ってもらおう』

言い終わると同時に再び螺子を投げる。

今度は地面ではなく海浜公園に溜まったゴミの山にぶつかり、それを倒壊させる。

砂埃が止むとそこに緑谷くんの影はなくなっていた。

当然血溜まりがある、なんてこともない。

おそらくゴミ山の倒壊と砂埃に乗じて物陰に隠れたんだらうね。

『さて、どうくるかな』

球磨川くんは再び螺子をかまえ、不敵に笑っている。

▽月曜日

今日も球磨川さんとなんでもありのサバイバル鬼ごっこ（という名

の実践形式の訓練）をしている。

『おつと……！』

球磨川さんの死角から自転車のタイヤを投げつけ、場所を気取られる前に遠くへ逃げる。急いで服を脱ぎ、そこら中に落ちている瓦礫や鉄くずをスリングの要領で球磨川さんのいる方向へ飛ばす。

『出久ちやーん』

『そんなんじゃ全然当たらないぜ』

いつの間にか見える範囲まで接近していた球磨川さんへ向けて、今度はしっかりと狙いを定め、即席スリングで鉄くずを飛ばす。

「球磨川さん、行きますー！」

鉄くずを避けて体勢の崩れた球磨川さんに、鉄パイプを構えて接近戦を仕掛ける。

『さあ、今日はいつまで持つかな？』

素早く体勢を整えた球磨川さんの巨大螺子と僕の持つ鉄パイプがぶつかる。

▽火曜日

月曜日に激しい運動をしたから今日のトレーニングは軽いランニングと柔軟だけで、あとの時間は勉強にあてている。

▽水曜日

球磨川さんもオールマイトもいない今日みたいな日はひたすら海浜公園の掃除をする。夏休みでない時期の平日は、朝と夕方という学校の少ない時間帯しか掃除ができないからできる限り多くのゴミを掃除できるようにしている。

▽木曜日

海浜公園の掃除は必ず2日連続でやるようにしている。オールマイトには2日おきに、というような指示を受けているし、超回復のことを考えると今日は休む方がいいのかもしれない。

だけど、海浜公園の掃除では特定の筋肉を鍛えることができない、

つまりより強い肉体を作るためにはより多くのゴミを運び体全体をいじめ抜く必要があるということだ。

なにより、僕の目標は「雄英高校入学式」ではなく「一流のヒーローになること」なんだから言われたことだけをやって満足していいはずが無い。

だから今日も僕はゴミを運ぶ。

#### ▽金曜日

筋肉通に悲鳴をあげる体を労り、今日1日は3日ぶりの休日として柔軟と勉強をひたすら頑張る。

まあ休日でない日も柔軟や勉強とかはしてるんだけど、休息日は特別たくさんやっていた。

#### ▽土曜日

週末は終日オールマイトに鍛えてもらっている。

メニューは日によって変わり、単純な筋トレから遠泳、格闘技の訓練まで様々なことをする。

#### ▽日曜日

半休息日的なこの日は、球磨川さんやオールマイトとのトレーニングで習ったことを初めとした1週間のトレーニングの復習と勉強を主に行っている。

---

気がつくとも10ヶ月が過ぎ去っていた。

海浜公園を掃除することでオールマイトの個性を受け入れるための、そうでなくともヒーローとなるために不可欠な基礎体力を身につけることができた。



オールマイトに鍛えてもらうことで身につけた力を上手く扱うための技術を身につけることができた。

球磨川さんとひたすら戦い続けたことで戦うことへの慣れや貪欲さを身につけることができた。

僕は本当に恵まれている、と心の底から思う。途中からほぼ休みなったり、トレーニングをするようになってオールマイトに二度ほど怒られたり、球磨川さんと戦っているうちに気がついたら冷蔵庫で近接戦闘ができるようになってしまったり、色々問題と言えるようなことがあつたけどそんなことがなんの問題でもないと思えるくらい僕は恵まれている。

今朝、ようやく海浜公園のゴミ掃除が終わりオールマイトの個性を受け継ぐことができた。

今日、ようやく10ヶ月のトレーニングが終わり雄英高校の受験をむかえる。

ようやく、ようやくここまで来たんだ。

ここが、僕のオリジンだ。

## 緑谷出久の戦い

ついにこの日がやってきた！

…みたいな顔をしている緑谷くんは、まあ確かに「この日」と呼べるような日を迎えることができた。

そう、雄英高校の実技入試の当日だ。

「ま、間に合った…」

今朝方ようやく海岸の掃除という名のトレーニングを全て終わらせ…もちろん彼がやっていたトレーニングもしくは訓練と呼べるものはその限りではないのだけれど。

それはともかくとして、ナンバーワンヒーロー（笑）の個性を受け継いだ彼はなんとか試験開始（正確に言えばその入室開始）時間間に合い、はじめの一步を踏み出…

「あ…」

せなかつた。

そう、彼はよりもよってはじめての一步をつまづいてしまったのさ。

「大丈夫？」

ただ、搦られる足あれば救う女子あり。

少し後ろを歩いていた女子受験生の個性によって浮かばせてもらい、無様に転ぶようなことにはならなかった。

いやー、めでたしめでたし。

まあ球磨川くんとおおよそ4ヶ月程度実践形式の訓練をし続けた緑谷くんなら、普通に前受け身なりなんなりをして事なきを得ていただろうけどね。

「大丈夫？」

「…個性っ!?!」

「ごめんね、勝手に…でも、転んじやったら縁起が悪いもんね!」

「緊張するけどお互い頑張ろうねえ」

じゃーねーと言って少女は去っていく。

緑谷くんは（女の子と喋っちゃった〜!!）みたいなことを考えていそうな顔をしているが、ところがどっこい残念ながら、あれは会話というより独り言のぶつけ合いだから喋ったとは言い難い。

つまづく直前にあった幼なじみの彼との一悶着の時も会話が出来ていなかったし、もしかしなくても緑谷くんは友達が少なく（というよりおそらくいない）コミュニケーション技術が一定水準に至っていない、いわゆる残念な奴ってやつなんだろう。

まあ知ってたけど。

ヒーローになりたいのに無個性で、それゆえに友達が存在せず、唯一の幼なじみからはいじめに近い扱いを受けている。

そんな人間性<sup>マイナス</sup>を抱えながら球磨川くんと接していたのにも関わらず過負荷<sup>マイナス</sup>に染まっていけないのは、やはり彼が主人公ってやつだからなんだろうか。

と、そんなことを考えているうちにも歩みを進めていた緑谷くんはとつくの昔に着替えも済ませ、実技試験の会場である模擬市街地演習場の1つの入口付近に着いていたようだ。

ふう…緊張するなあ。

これから始まるのは実技試験、油断をすることも気負いしすぎるのもダメだ。

球磨川さんと実践形式の訓練をやっていた時と同じようにリラックスをして望まなきゃいけない。

ふう…。

よしっ！

心は落ち着いてきたけどそれ以上の問題がある。

それは、「持ち込み自由」のルールだ。

入試要項にはつきりと明記されていたはずなのに、今さつきプレゼントマイクに言われるまで完全に忘れていた…。

実質的には無個性と変わらない僕が実技試験をパスするためには絶対に道具が必要になる。

なのに、僕はこの実技試験の会場にそれらをほぼ全て持ってきていない。

鉄パイプもブラックジャックも鎖鞭も冷蔵庫もない。今手元にあるのは、制服用のベルトと万が一のためにいつも持っているスリング用の幅広のネクタイと小さなカッターだけだ。

といつても、この問題も言うほど大きな問題というわけでもない。

もちろん、仮想敵<sup>ヴァイラン</sup>というビックリ大型特殊車両のお手本みたいな大きさの相手と戦うことが簡単なんてことはないけれど、ありあわせのもので戦うことにはもう慣れている。

つまり、精神的にも装備的にも（不安はあるけど）大きな問題はないつてことだ。

あとはスタートの合図を待つ…いや、もう始まっていると思わなきやダメなんだった…。

『出久ちゃん、戦いの場っていうのは丁寧に用意されているわけじゃないんだぜ』

『むしろ、いつだってどこだって戦場になる可能性があるんだ』

『それは外を歩いている時かもしれないしシャワーを浴びている時かもしれない、もしかしたら少年ジャンプを読んでいる時かもしれない』

『だからね、出久ちゃん』

『いつだってスタートを切れるように、その心構えだけは忘れちゃいけないよ』

いつだったか球磨川さんに言われたことを頭の中で反芻しているとスタートの合図が出た。

スタートの準備が出来ていない他の受験生の間を駆け足ですり抜けて、仮想敵を探しに演習場へ足を踏み入れる。

《標的捕捉!》

《ブツ殺ス!》

…なんでこんなことを言うようなプログラムを組んだんだろうか。  
仮想敵のプログラムに疑問を抱きつつ、早速倒すための算段を立てる。

『出久ちゃん、戦う時にはコツってのがあるんだ』

『いや、別に難しい話じゃないさ』

『戦う時のコツ、それはね…』

それは弱点<sup>弱さ</sup>を知ること、ですよね!

僕の目の前にいる仮想敵は1 P<sup>ポイント</sup>だ。遠くにいる2 Pや3 Pの仮想敵を見る限り、1 Pは1番小さく脆そうに見える。

小さいといっても大きさは僕の2倍近くだし、小さくて脆い代わりに速さ素早さは1番ありそうだけど。

試しにネクタイスリングで落ちていた鉄くずを飛ばしてみる。

テクトーに投げた鉄くずは仮想敵の右腕(?)の非装甲部を壊しその機能を失わせた。

そのまま何度か投げたり攻撃を避けたりしつつ周りを観察しているうちに次のことがわかった。

①非装甲の部分は結構脆く出来ていてスリングはもちろん、鉄パイプを使えば僕の筋力だけでも壊せること。

②代わりに装甲の部分は頑丈に出来ていて1 Pのやつでも簡単には壊せそうにないこと。

③仮想敵は機体についているカメラで周りの状況を把握しているのか、カメラが壊されるとグルグルその場を回るようになること。

④1 Pのサイズは3 mくらいで素早い代わりに直線的な動きしか

できず、また武器がガトリング砲で全体的に機体が脆いため射線を避けて攻撃をすれば比較的容易に壊せること。

⑤ 2Pのサイズは4・5mくらいで四足歩行をして近中距離の武器を持つているためバランスが良いけど、1Pよりだいぶ愚鈍で武器がひとつしかないでそこを突けば壊せそうだということ。

⑥ 3Pは6mを超える大きさでほぼ固定砲台と化しているが、10門のミサイル発射口と強固すぎる装甲のせいで僕の力じゃ付け入る隙がないということ。

⑦ 周りの受験生を見る限り、仮想敵の使う武器は直撃しても死にはしないものの当たりどころが悪いとかなり酷い状態になりそうだということ。

とりあえずわかったのはこの7個。

つまり、僕は1Pを中心に倒しつつ2Pをたまに倒す、この戦いをするのが現状ではベストだってことだ。

正直ここまで冷静に細かな分析が出来ていることにびっくりだけど、これもどれも球磨川さんのトレーニングのおかげなんだろうなあ…。

心の中で球磨川さんへの感謝を述べつつ次の行動へ移る。

敵戦力の分析が済んだ後に行うのは装備の準備だ。

ジャージを脱いで左腕に巻き付け、分析のために破壊した1P仮想敵の装甲の中で一番小さいものを選びジャージを巻いた自分の左腕に合わせる。

そのまま制服のベルトで真ん中を縛って固定し、浮いている両端を仮想敵からカッターを使って取り出した細めのコードで止める。

これで簡易的な盾の完成だ。

さっきの分析でわかった通りかなりの強度があるからきつと盾としてちゃんと機能してくれるだろう。

盾が完成したあとは仮想敵から適当な大きさの鉄パイプを取り出して右手で構える。

スリングを使う時は左手に持ち替えればいいし、これで攻守ともに

近距離遠距離で戦える。

鞭とか紐系の中距離攻撃ができないのは痛いけど贅沢を言っても仕方がない。

これで準備は終わりにしよう。

よしっ、攻撃開始だ！

実技試験終了まで残り：8分20秒

## 新たな兆し

遠くから直進してくる仮想敵へスリングで鉄くずを飛ばしてカメラを壊し、立ち往生させる。もう一度振りかぶり、動きが単純になった1P ポイント 仮想敵の喉元の非装甲部を破壊する。

それを繰り返しつつ2P 仮想敵の元へ向かうが…

「つ…そんな簡単には近づけないか！」

2P 仮想敵による攻撃によって行く手を阻まれる。

「なんらかの衝撃波か、それともクレイ弾のようなものを飛ばしているのか、おそらく受験生の生死に関わるような硬い実弾のようなものではないんだろうけど…いや、しかし、周りを見る限り仮想敵の攻撃で倒れている受験生もいるわけで、受けるか逸らすか避けるかして直撃は避けるべきか…。ただ、避けながら進むことは不可能に近い…。じゃあ一か八か受けるか逸らすかしてるのが上策…。？でも、実体を持たない攻撃、例えば衝撃波とかであった場合逸らすことはできず直撃を受けるわけで…。」

考えながら2P 仮想敵へ近づいていくが、距離が近づいていけばいくほど攻撃の間隔は狭まり避けることが困難になっていく。

そして、ついに仮想敵の攻撃が僕を捉えた。

「くっ…。」

とつさに左腕を突き出し盾を使って自分の身を守る。

「…なるほど、なるほどね」

盾の角度が良かったのか、仮想敵の攻撃は上手いこと逸らされ直撃は回避された。

「つまり、実体はきちんとあるものが飛ばされているってことか」

それに、逸らした時にそれほど強い余波を受けなかった。そのことから、きつと直撃しても一発KOというようなことにはならないだろう、ということもわかった。

「よし、行くぞー！」

と言いながらUターンし、後ろから迫ってきていた1P 仮想敵の攻



撃をすれ違うように避ける。

僕に体当たりを避けられた1P 仮想敵は2P 仮想敵にぶつからないように急ブレーキをかけようとするが、そうはいかない。

間をおかず、再度Uターンし助走をつけて1P 仮想敵の背中部分を飛び前蹴りで蹴り飛ばす。その結果、1P 仮想敵は勢いそのまま2P 仮想敵と衝突した。

今、僕の目の前には動かなくなった1P 仮想敵とそれによって動きにくくなっている2P 仮想敵がいる。

鉄パイプをしつかりと握り直し、2体の仮想敵の下へと駆ける。2P 仮想敵が1P 仮想敵から離れ攻撃を再開するより数手早く、僕の足が1P 仮想敵を踏み台にする。

5つあるセンサーのうち、正面取り付けられている3つは1P 仮想敵に塞がれ、残りの2つは横側に付いている。そんな状態にある2P 仮想敵は僕の飛びかかりに反応できなかった。そして2P 仮想敵は、その頭部の発射口に鉄パイプを貫通させられた。

2P 仮想敵は首に組み付く僕を振り落とそうとするが、なんとかそれを凌ぎ首にまたがる体勢になる。暴れる仮想敵をよそに、僕は仮想敵の首から飛び降りた。

… 仮想敵の後頭部から突き出る鉄パイプの先端を持って。

高さと重力による力によって頭部が捻り壊された2P 仮想敵は時間を置かずその動作を停止した。

「ふう、これでようやく2P 仮想敵を倒せたなあ…」

今の3Pでちやうど20Pか…。

合格の条件がわからない以上もつと狩っておきたいところだけど… そろそろ時間がまずいなあ。

ってそんなことを考えている暇があったら1Pでも多く倒しておくべきか…！

時間を気にしながらより一点でも多く点を稼ぐため、次の狩場となりうる場所を目指し駆け出した。

2P 仮想敵を倒してから少しして、ようやく見つけた1P 仮想敵を倒したその時、ビルが倒壊する爆音と共にその倒壊したビルと同等の

大きさの仮想敵が現れた。

OP 仮想敵だ。

「まずったなあ」

初めの方は良かった、というより今さっきまでは割と順調に試験内容をこなしていたはずだった。

しかし、その順調は今日の前にそびえ立っている大きすぎる仮想敵の出現によって崩れ去ってしまった。自分ひとりだけなら助かったかもしれないが、OP 仮想敵が出現した時自分の周りには複数の受験者がいた。

試験時間も残り少なくなり、同時に仮想敵の残りも少なくなってきた時にあぶれていた彼らは、戦闘が苦手な方なようでOP 仮想敵を前にして動けなくなってしまうていた。

そんな彼らを救げるために個性を発動し方々へ流したことに後悔はない。

そんな行動に、これから起こる事柄に後悔はない。

しかし、それでも…

「それでも痛いのは怖いなあ…」

複数人の受験生を同時に浮かせ、安全圏まで避難させたことで体力は限界まできている。幸運なことに吐き気こそないものの、今から自分に対して個性を発動してこの場から逃げ切れることは到底不可能な状態である。

そんな風に考え諦めかけていたその時、遠くの方から声が聞こえてきた。

「大丈夫ですかあっ!？」

それは入試が始まる前に転びそうになっていた、地味目の人の声だった。

ダメだ、ここにきたら危ない、そう声を上げる前に再度声が掛かる。「安心してください、助けにきました!」

そう言い終わるや否や地味目の人は空高く跳びあがり

「スマッツツツツシユ!!!」

掛け声と共にあの巨大すぎるOP仮想敵を粉碎した。

絶叫しながら落下する彼をなんとか個性で浮かせるも、体力に限界がきてしまう。

どうにか恩返しをしたいなあ、と考えながら気を失い、気がつくとき試験は終了していた。

入試が終わった。はつきり言って点数が足りないような気がしてならない。

もちろん、突然流れてきた怯えながら浮いている謎の人たちを辿って、結果今朝の人を助けられたことを後悔したりしてるわけじゃない。

むしろ後悔し反省すべき点は他にある。ありすぎる、と言っても良いくらいだ。準備を怠ったことや分析に時間がかかりすぎてしまったこと、せっかくオールマイトから受け継いだ個性を上手く活用できなかったことなど際限なく挙げられる。

なによりも個性を発動した後、今朝の人に救けてもらわなければ死んでいたかもしれなかった、このことが一番の反省点だ。

助けに行ったはずなのに助けられる、他の誰かに救けてもらわなければまともに戦えない、そんなんじゃないどころかそもそもヒーローになることすらできない。

そんなことを考えながらどんよりと帰り道を歩いていると、突然声をかけられた。

『あれ、出久ちゃん?』

『ぶつぶつ独り言をしながら歩いてるぶつかるよ?』

『主に人間関係の壁とかに』

球磨川さんだった。

「こ、こんにちは…」

「入試を受けてきたんですけどね、実はひどい失敗をしてしまつて…」

ぽつぽつと今日のことについて話す。主に個性の制御がきかず腕がおしやかになつてしまった話についてだ。

『ふーん、制御ねえ』

『いや、出久ちゃんがしたいならやってもいいとは思うんだけどさ』

『過負荷僕としてはそれもどれも”使しよう”だと思うんだよね』

たしかに球磨川さんは今までも似たようなことを言っていたけれど…。こんな暴走列車みたいな使い方しかない力に…。いや、オールマイトから受け継いだ個性を持て余すことしかできない僕に、そんなことができるんだろうか。

『まあ色々方法は考えられるけど』

『例えば指だけで使うとか、ね』

「…え？」

『その個性は別に腕全体をつかなくやいけないようなものじゃないでしょう…』

『なら、制御なんてまどろっこしい努力をする前に』

『そんな強者の猿真似プラスをする前に』

『その”100%の力”を、視点を変えて機転を利かせて使うべきなんじゃないかな』

『肉を切らせて骨で断つ、力の使い方ってのはそういうもんだぜ』

衝撃的である。僕は「いかに傷を負わずに個性を使うか」なんて風に考えていたけれど、そうじゃない。

本当に大事なのは「どんなに傷を負ったとしても倒れずに個性戦い続けるを使う」ってことなんだ！

手札の数や良し悪しじゃない、限られた手札を使い切つて戦い切る戦い続けることが大事なんだ。

「すみません、初心を忘れて舞い上がってたみたいです…」

「これからも球磨川さんに教わったことを大切に、立派なヒーローになれるよう頑張ります！」

『いやいや、そんな大したことは言っていないさ』

『それじゃ』

『また明日とか!』

球磨川さんはそう言って颯爽と去っていってしまった。見返りも求めず弱者の味方をする、そんな球磨川さんこそ立派なヒーローなんじゃ、そんな見方もあるんじゃないだろうか。

少なくとも僕が少し前ブラス向スきな気持ちで家に帰ることができたのは球磨川さんがいてくれたおかげだ。